

ロゼッタネットを支える テクノロジー XML

ここではロゼッタネットを支える最大の技術、XML (eXtensible Markup Language) について、その全体像を解説する。

ロゼッタネット標準は、サプライヤーとバイヤー間の電子商取引で交換されるメッセージの記述で、このXMLをフル活用している。さらに、今後メッセージ交換のインターフェイス定義やウェブサービスや、ebXMLと呼ばれるオープン標準のメッセージング技術についても、さらにこのXMLの活用が進められていく。

XMLは、World Wide Webコンソーシアム(W3C)で標準化が行われ、1998年2月に正式なW3C勧告XML1.0として発行された階層型の文書およびデータの表現形式である。

XMLは、①仕様がオープンで、特定のITベンダーやコンピュータ・プラットフォームに依存しない(この特性は、ロゼッタネットのようなオープンな業界標準用の基盤言語として重要である)、②そのままコンピュータにも理解可能で、スタイルシートをあてがえば人間も自由な書式を与えて読んで理解できる、③「標準化」により豊富な意味を持つメッセージが開発可能である、④メタ言語として究極の拡張性を持っている、⑤XML Schemaなどで記述

される名前空間を利用した自己記述性 (Self-described) を持つ、つまり自分で自分を説明できる文書やデータを定義できる、⑥既存の企業データ (主にリレーショナル・データベース) との間で、柔軟なデータ変換が可能である——という特性を持っている。

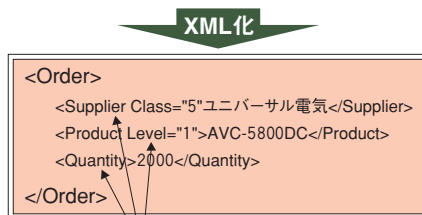
これらの特性の中で、「XMLの自己記述性」が最も重要な特性である。XMLでは、データ要素をタグで挟んでその意味を示し、データ要素を入れ子にして要素の親子関係を定義する(図)。

こうしたXMLのデータ型や構造の仕様は、同じくXMLシンタックスで書かれたXML Schemaを使用して定義することができる。XML文書のデータ仕様は、紙の文書に書かれているのではなく、こうしたXMLベースの定義体で書かれているので、コンピュータによる高度な処理が可能になっている。

このようにロゼッタネットのようなサプライチェーン管理の自動化を目指す標準では、コンピュータ同士を高度に連携させる必要があり、XMLのような自己記述型の言語の活用が必須になっているのである。

XMLの自己記述性

「最重要サプライヤーのユニバーサル電気が販売している
新製品AVC-5800DCを2000台購入する」



コンピュータでも、要素タグ名、属性タグ名を通して、データの意味が理解できる

XMLの自己記述型文書の特性

発注書をXMLで表現する